

光源氏の「たはむ戯れ言」

村口進介

はじめに

若菜上巻の巻頭近く、六条院御幸ののち重く患う朱雀院を光源氏の使者として夕霧が見舞う。夕霧を垣間見ていた女房たちが「いとありがたくも見えたまふ容貌、用意かな。あなめでた」(④二五)と褒めそやすのに対し、老女房が往時の光源氏とは比べものにならないと応じる。そのやりとりを聞いていた院が、准太上天皇の位を得た今、光源氏は貫禄が増したうえに、「光るとはこれを言ふべきにやと見ゆるにほひ」がたいそう加わつたと言ひ、人物評を次のように続ける。

A うるはしだちて、はかばかしき方に見れば、いつくしくあざやかに目も及ばぬ心地するを、またうちとけて、戯れ言をも言ひ乱れ遊べば、その方につけては、似るものなく愛敬づき、なつかしくうつくしきことの並びなきこそ、世にありがたけれ。何ごとにも、前の世推しはかられて、めぐらかなる人のありさまなり。(同二六)

「うるはしだちて、はかばかしき方」、威儀を正し、公事に携わ

る姿は毅然とし、端麗で近寄りが見たい雰囲気もある一方で、くだけた場で見せる「戯れ言をも言ひ乱れ遊」ぶ姿はまたとない魅力に満ち、人を魅了してやまないと言う。

政治家としてふるまう光源氏よりも、私的なうちとけた姿にこの上ない魅力を見出す視線は、内大臣(重中将)にも認められる。婿を迎える夕霧を評するなかで光源氏に触れて、

B かれはただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地ぞしたまふ。公さまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。(藤裏葉③ 四三六―七)

と言う。「公さま」に対する評価が院と対照的なのはいかにも興味深いがいまは措き、A、Bに共通する「愛敬づく」に着目してみれば、明石巻にも「うち乱れたまへる御さまは、いとぞ愛敬づき、いふよしなき御けはひなる」(②二四七)といった一節があり、いずれも二重傍線のような文末表現によって、くつろいだ光源氏に横溢する魅力が捉えられている。

これは東帯姿よりも「しどけなく」直衣を着くずした光源氏を「女にて見たてまつらまほし」(帚木①六一)、「見ても飽かぬ

心地ぞする」(菱②五五)と賛美する叙述にも通じ、内大臣はじめ藤原氏の人々が「ものものし」「ををし」などの形容詞によつて格式ばつた人物像を結ぶのに対し、うちとけた光源氏に女性的な美質を見い出す視線は物語に一貫する。本稿はそのような光源氏像を捉えた朱雀院の評言のなから、具体的に言及される光源氏の「戯れ言」に着目し、その一面を捉えたい。

一

「戯れ言」を言う光源氏を前掲引用文と同じく、「愛敬づく」の語で取り押さえる場面が玉鬘巻にある。長谷寺参詣のため里下がりしていた右近が七日ふりに出仕したのを認めた光源氏が、次のような「戯れ言」を言いかける。

C 「などか里居は久しくしつる。例ならずや。まめ人の、ひきたがへ、こまがへるやうもありかし。をかしきことなどありつらむかし」など、例のむつかしう戯れ言などのたまふ。(玉鬘③一一八)

まじめな人がうつつて変わつて若返ることもあるようだ、おもしろいことがあつたに違いないと、異性と交渉をほのめかした「戯れ言」でからかう。「例の」とあるように、女房相手にこの手の冗談を口にすることが日常的であつたらしいことは、その夜、長谷寺での出来事を詳しく聞くため、右近を「御脚まるり」に召したおりに、「若き人は苦しとてむつかるめり。なほ年経

ぬるどちこそ、心かはして睦びよかりけれ」と言う光源氏に対し、他の女房たちがひっそり笑いながら「うるさき戯れ言」、そのような厄介な冗談を仰るのが困る、などと言ひ合う様子からもうかがえる(同一九二〇)。光源氏はさらに「上(紫の上)も、年経ぬるどちうちとけ過ぎば、はたむつかりたまはんとや。さるまじき心と見ねば、あやふし」、年寄り同士が親密になりすぎると紫の上の不興を買いかねないと冗談を重ね、そのような光源氏が「いと愛敬づき、をかしきけさへ添ひたまへり」と評され、これに直接して次の一文が続く。

D 今^レは朝廷に仕^レへ、いそがしき御ありさまにもあらぬ御身に^レて、世の中のどやかに思^レさるるままに、ただはかなき御戯れ言をのたまひ、をかしく人の心を見たまふあまりに、かかる古人をさへぞ戯れたまふ。(同一二〇)

内大臣へ太政官政務の実権を譲りたいま、政治の繁忙から逃れ、六条院で自適に過ごす光源氏の様子が、女房たちをためすため、「ただはかなき御戯れ言」を弄し戯れる姿としてかたどられる。政治の世界から距離を置き、閑雅な生活を送る光源氏のあり様は、立后争いに敗れた内大臣が妬心を込めながらすでに語っていた。

E 「大殿も、かやうの御遊びに心とどめたまひて、いそがしき御政どもをばのがれたまふなりけり。げに、あぢきなき世に、心のゆくわざをしてこそ、過ぐしはべりなまほしけれ」(少女③三八)

二重傍線を付した語句は六条院造宮の発端となる、光源氏が齋宮女御、紫の上と交わした春秋優劣論中の「年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくこともしはべりにしがな」(薄雲②四六二)、「時々につけたる木草の花に寄せても、御心とまるばかりの遊びなどしてしがな」(同四六五)に符合する。その意味で光源氏の願望は二条院においてすでに実現していたとも言えようが、六条院は季節毎の「花紅葉、空のけしき」「木草の花」にこと寄せ、「遊び」を催すのに相応しい空間として成立し、その日常を切り取ったDの末尾に、岩波文庫本(新版)は「権勢家の余裕ある態度として、猿蓑言を言う源氏が、六条院移居以降描出される」と施注する。²⁾

その一例として、六条院の蹴鞠の閉じめにあたる場面を取り上げた。思いがけず立ち姿を垣間見たことで女三の宮への恋情を募らせる柏木相手に、光源氏は「昔物語」かたがた、柏木の父、太政大臣(内大臣)とは何事も勝ち負けを競ってきたが、蹴鞠だけは歯が立たなかった。こうした遊戯に「伝へ」もあるはずないが、柏木の足さばきは父親ゆずりで筋がよく素晴らしくいと、その技量を褒め称えた。これに続く応答を次に挙げる。

F (柏木ハ) うちほほ笑みて、「はかばかしき方にはぬるくはべる家の風の、さしも吹き伝へはべらむに、後の世のためことなることなくこそはべりぬべけれ」と申したまへば、(光源氏)「いかでか。何ごとも人にことなるけぢめをば記し伝ふべきなり。家の伝へなどに書きとどめ入れたらむこ

そ、興はあらめ」など戯れたまふ御さまの、にほひやかにきよらなるを見たてまつるにも、(若菜上④一四四〜五) 政務の面で劣る「家風」が、そのような遊戯の技を「吹き伝へ」たところで子孫のためにもならないと苦笑まじりに謙抑する柏木に対し、光源氏は何ごとにおいても人より優れた点は伝承されるべきで「家の伝へなどに書きとどめ」ておいたらおもしろからう、と「戯れ」る様子が、柏木の目に「にほひやかにきよらなる」と映る。

ここに、光源氏の第一級の美質を言い表す「きよら」に加え「にほひやか」という、「いとあてになまめいたまへれど、にほひやかになどもあらぬを」(若紫①二二七)などから上品な美しさを示す語彙とは対立し、「いみじう愛敬づきて、にほひやかにうち赤みたまへる顔」(夕霧④四七三)と、朱雀院たちがうちとけた光源氏に見出していた「愛敬づく」に連なる語が見える。本来は並立しないはずの二語の組み合わせから、「それが光源氏の絶対的な美であろう」との指摘もあり、女三の宮への恋情をくすぶらせつつも「戯れ言をも言ひ乱れ遊」ぶ光源氏に魅了されずにはいられない柏木が点描されている。

二

前節の終わりに取り上げた光源氏の「戯れ言」(F)は、柏木に対する絶対的に優位な立場性ゆえにおのずと皮肉の気味も

帯びる。ある「戯れ言」が単なる冗談となるか皮肉となるかは話者の意図を越えて口ぶりや表情、あるいは受け手の立場や心理状態など、複雑な文脈が絡み合うなかで揺れ動くが、ここでは「戯れ言」の語は見えないものの、その拡がりの一つとして光源氏の冗談が受け手に「いとからし」の感情を抱かせる二つの場面を取り上げたい。

梅枝巻、明石の姫君の入内準備の一環として紫の上たちに依頼していた薫物を試み、月下の後宴も果てた明け方、判者を務めた兵部卿宮の帰宅にあたり、光源氏はお礼として直衣に薫物二壺を添えて贈る。それをきっかけに二人のあいだで贈答歌が交わされる。

G (宮) 花の香をえならぬ袖にうつしもて事あやまりと妹や

とがめむ

とあれば、(光源氏)「いと屈じたりや」と笑ひたまふ。御車繋くるほどに追ひて、

「めづらしと古里人も待ちぞみむ花のにしぎを着てかへる君

またなきことと思さるらむ」とあれば、いといたうからがりたまふ。(梅枝③四一二)

独身であるにもかかわらず、さも妻がいるかのようにおどけることで贈物の素晴らしさを称える宮の贈歌に対し、光源氏は「ずいぶん弱気だね」と笑みを浮かべつつ、着飾って帰る君をまったくめづらしいことだと「古里人」も思うだろう、と軽妙に切

り返す。このやり取りをめぐっては『源氏物語玉の小櫛』に、「ことさらにたはぶれて、かくのたまへるなり」としたうえで、源氏君の返しは、卑下したる歌なるべきに、かへりてたはぶれて、花の錦など、ことごとしくのたまへる故に、こなたより、えならぬ袖などよみ給へるは、ただよのつねの賞美になりて、けおさるるを、からがり給ふ也⁴⁾

という的確な注がある。宮にすれば一本取られたという程度の「からがり」で、「いといたう」の豊語が大仰な演技性を帯び、二人の親密な関係性をうかがわせる。

それに対して次に取り上げる常夏巻の場面は、より辛辣な印象が強い。夏の「いと暑き日」、光源氏は夕霧や内大臣の子息である弁少将や藤侍たちと六条院の東の釣殿で、西川で採れた鮎などを食しながら涼んでいた。暑さに耐えかねる光源氏はものに寄りかかりながら「いとかかるころは、遊びなどもすまじく、さすがに暮らしがたきこそ苦しけれ」(③三三三〇四)と、この暑さではさすがの六条院も「遊び」を催すには興ざめで、さりとて何もしないで過ごすのも面白みに欠けると言うのに続け

H ここにてだにうち乱れ、このごろ世にあらむことの、すこ

しめづらしくねぶたさ醒めぬべからむ、語りて聞かせたまへ。何となく翁びたる心地して、世間のこともおぼつかなしや(同三三四)

と、君達たちに眠気も覚めるような世語りをうながす。しかし、

さしたる話題も思いつかず押し黙る彼らに、光源氏は内大臣が「外腹のむすめ」を迎え取った噂を質す。弁少将から真相を聞いた光源氏は「らうがはしく、とかく紛れたまふめりしほどに、底清くすまぬ水にやどる月は、曇りなきやうのいかでかあらむ」、昔の内大臣は忍び歩きを欠かさなかつたようだから、身分の低い女の産んだ娘がすぐれているはずはなからうと、仔細を知る夕霧も「えしもまめだたず」、笑いをこらえきれない皮肉を「ほほ笑み」ながら口にし、弁少将と藤侍従に「いとからし」と思わせる(同三五)。

光源氏は夕霧に対しても「朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ。人わろき名の後の世に残らむよりは、同じかさしにて慰めむに、なでふことかあらむ」と、あたかも「弄じたまふやう」な軽口を重ねる。夕霧と雲居雁の縁組を認めない内大臣への不満から出た言葉であつたが、このあと光源氏はそれを取り繕うかのやうに、「心やすくうち休み涼まむや。やうやうかやうの中に厭はれぬべき齢にもなりにけりや」と言いつつ、玉鬘のいる「西の対」へ渡る(二二六〜七)。

ここで傍線部を付した、自らの加齢を強調するような物言いに留意したい。一連のやり取りの契機となつたH傍線部にも同趣の発言が見え、一連の場面における光源氏は翁を装う態度で一貫している。夕霧の「親ともおぼえず、若くきよげになまめてきて、いみじき御容貌の盛りなり」(野分③二六六)の他にも、右近(胡蝶③二七九)や玉鬘(螢③二〇三)の目を通して、光源氏

の「若さ」が強調される一方で、第一節で触れた右近とのやり取りでも「年経ぬるどち」を自称してみたり、「盛り過ぎたる人は、酔泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」(篝火③二五九)というように、自らを老人に見立てる発言が玉鬘十帖の随所に見られ、六条院の光源氏はしばしば進んで翁を演じる。

『源氏物語』の「翁」とその派生語を検討した永井和子氏は、男性貴族が用いる「翁」は「そのすべてが会話文中にあ」り、「その会話は軽妙・冗談めいたもので」、「自称の場合は基本的には実際は本人はそれほどの高年齢ではない。むしろ余裕をもつて『翁』を演ずるのであろう。そして『翁』と自称することによつて、その場に何らかの意味で積極的に働きかけている」と述べる。これに鑑みれば当該場面の、近江の君の話題に乗じた内大臣への辛辣なあてつけも、老いの痴れ言と解しうる枠組みに収まる。

この種のふるまひは『蜻蛉日記』の藤原兼家や「枕草子」の道隆もよくするところで、石坂妙子氏は「地位と権力を手に入れた壮年の男が、誰憚ることなく『老い』を強調する、そのことがことばの意味とは裏腹に自信と余裕をあぶりだすという効果を持つ」とし、また『紫式部日記』の敦成親王の「し」とに濡れて喜ぶ道長も加えて、彼らの〈猿楽言〉は「栄華の主役として自他ともに認める人臣最高の権力者であることを印象づける方法」で、「周囲を笑いの渦に巻き込んで、誰憚ることなく覇者であることを自認する場面の中心」にあると指摘

する。⁽⁶⁾ ここまで見てきた光源氏のふるまいは彼らの列に連なつて理解することができ、そしてF、G、Hのいずれもが「ままとまりの場面の閉じめに位置していることも、「戯れ言」を発することでの会話の主導権を握り、場を領導する特権的な立場にあることを印象づけるのに一役買つていよう。

またDに、光源氏が「戯れ言」を言うのは、「をかしく人の心を見たまふ」ため、とあつた点もあらためて想起しておきたい。物語には「戯れ言いひふれてこころみたまふ」(紅葉賀①三三六)のように「戯れ言」と「こころみる」の共起が二例あり、東の釣殿で展開されたH以下の場面などは光源氏が弁少将たちを「こころみる」⁽⁷⁾「心(を見る)」ふるまいに他ならず、人心を掌握する術の一つとして光源氏が「戯れ言」を利活用していた様相が窺知される。六条院を舞台とする場面以外でも、自分に付き従つて須磨へ下向し沈淪の時を過ぐす従者たちを慰めるため、「昼は何くれと戯れ言うちのたまひ紛らは」(須磨②一九九)す姿や、明石へ乳母として下向する宣旨の娘を気づかつて「とかく戯れたま」(濡標②二八八)う姿なども、同様に理解されよう。

柳町時敏氏は明石巻以降に目立つ「論者」としての光源氏について、「論ずる」ことを通して「作中世界の他者との間に新たな人物関係をと結び、また同時に物語世界の人間関係をも支配」する「実相」を読んだが、「戯れ言」も人間関係を統べる光源氏の特徴的な言語行為の一つに位置づけられるのではなからうか。

三二

前節では光源氏の同性に対する、時に皮肉の気味も帯びる「戯れ言」について見てきたが、本節ではCのような異性に対する、色めいたニュアンスを帯びた「戯れ言」に焦点を当てる。『源氏物語』に「戯れ言」の用例は十八例を数えるが、こちらでの使用例がその多くを占める。

・中納言の君、中務などやうのおしなべたらぬ若人どもに、戯れ言などのたまひつつ(帚木①九一)

・(光源氏ハ)つつむこと多かる身にて、はかなく人に戯れ言を言ふもところせう、とりなしうるさき身のありさまになんあるを、(夕顔①一八四)

前者は葵上付きの女房たちへの「戯れ言」、後者は身分の高さゆえ「戯れ言」を控える光源氏の性情を示す一節である。このような異性に対する色めかしい「戯れ言」は、逆に女房たちが光源氏に「こころみに戯れ言を聞こえかかりなどするをり」(紅葉賀①三三五)もあり、貴族社会のたしなみ、あいさつとして交わされていたようで、光源氏と源典侍の関係も「こころみに戯れ言」を言いかけることから始まっていた。

・(源典侍ガ)かうさだ過ぐるまで、などさしも乱らむと(光源氏ハ)いぶかしくおぼえたまひければ、戯れ言いひふれてこころみたまふに、似げなくも思はざりける。(紅葉賀①

・人(源典侍)に従へば、すこしはやりかなる戯れ言など言ひかはして、これもめづらしき心地ぞしたまふ。(同三四〇)源典侍との交渉は内大臣をも巻き込んでいかにも滑稽譚というにふさわしい展開を見せてゆくが、ここにもう一人、光源氏との関係が「戯れ言」の語によつて象られてゆく人物に玉鬘がいる。養女を装い六条院に迎えた玉鬘への恋情を抑えがたい光源氏は、ついにその思いを打ち明け、「ただ昔恋しき慰めに、はかなきことをも聞こえん。同じ心に答へなどしたまへ」(胡蝶③一八九)と、「いとこまかに」言い寄り、玉鬘に共感を求める。ここの「はかなきこと」は、とりとめのないことといった意味合いだが、初音巻で光源氏が二条東院に空蟬を訪ねた際の「はかなき言をのたまひかくべくもあらず、おほかたの昔今の物語語をしたまひて」(③一五七)などは色めかしいニュアンスが濃く、こちらへ容易に傾くことは、この直後の「色に出でたまひて後は、『太田の松の』と思はせたることなく、むつかしう聞こえたまふこと多かれば」(胡蝶③一九二)、つづく螢巻の「大臣も、うち出でそめたまひては、なかなか苦しく思せど、人目を憚りたまひつつ、はかなきことをも聞こえたまはず」(③一九六)に明らかである。そしてこの螢巻と同じ状況を記す一節、「人々近きさぶらへば、例の戯れ言も聞こえたまはで」(③二三二)が常夏巻にある。ここでは「はかなきこと」が「戯れ言」に換言されたうえに「例の」とあり、人目を忍んで「戯れ言」を玉

鬘に言いかけることがもはや常態化している。

懸想された当初は「心づきな御心のありさまを、疎ましう思ひはてたまふにも、身ぞ心憂かりける」(胡蝶③一九〇)と嫌悪感しかなかった玉鬘もこの頃になると、「はじめこそむくつけくうたてとも思ひたまひしか、かくてもなだらかに、うしろめたき御心はあらざりけりと、やうやう目馴れて、いとしも疎みきこえたまはず、さるべき御答へも、馴れ馴れしからぬほどに聞こえかはしなどして」(常夏③二三五)と、強引な態度に出ようとはしない光源氏の深意を感じ取つて、疎ましさは和らぎ、距離を保ちつつ相応の受け答えをするようになっていた。

次の篝火巻ではさらに歩を進め、「憎き御心こそ添ひたれど、さりとして、御心のままに押したちてなどもてなしたまはず、いとど深き御心のみまさりたまへば、やうやうなつかしううちとけきこえたまふ」(③二五六)と、「憎き御心」への厭わしさよりも、「深き御心」がいつそうまさるにつけて、玉鬘の心も徐々に開かれ慣れ親しんでゆく、とある。そのような二人のあり様を具体的に描き出した場面が野分巻にある。

I (光源氏) 近くゐたまひて、例の、風につけても同じ筋にむつかしう聞こえ戯れたまへば、たへずうたてと思ひて、(玉鬘)「かう心憂ければこそ、今宵の風にもあくがれなまほしくはべりつれ」と、むつかりたまへば、いとよくうち笑ひたまひて、「風につきてあくがれたまはむや、軽々しからむ。さりともとまる方ありなむかし。やうやうかかる

御心むけこそ添ひにけれ。ことわりや」とのたまへば、げに、うち思ひのままに聞こえてけるかなと思して、みづからもうち笑みたまへる、いとをかしき色あひつらつきなり。

(三二七八)

激しい野分に襲われた翌朝、六条院の御方々を見舞う光源氏は玉鬘のもとを訪れ、風の見舞いにかこつけて、「例の」ように恋情を訴える。玉鬘はたまらず不快感から、昨夜の風に吹かれてどこぞへ行つてしまいたかつたと言ひ、その言葉尻を捕らえた光源氏の軽妙な切り返しに、深く考えることなく思いつくままに言葉を発したことに思わず笑みを漏らす。こんな時にもいつもの調子で色めいた冗談を言う光源氏を厭わしく思いつつも、すっかり心を許している玉鬘の機微が見事に活写されている。

このような二人の様子が夕霧の目には「かく戯れたまふけしきのしるき」、光源氏の猥らな冗談をいうそぶりがはつきりと映り、その間柄を不審に思う「あやしむわざや、親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかはと目とまりぬ」(同二七九)という一節につながつてゆくが、ここにはこれより先の、はつきりとは聞き取れないものの、光源氏と紫の上の「ほのぼの、かやうに聞こえ戯れたまふ言の葉のおもむき」から、二人の「ゆるびなき御仲らひ」(同二七一〜二)を感じ取つた残像も揺曳していかうか。

結局、玉鬘は鬚黒の手に落ち、二人の危うい関係は途絶えるが、六条院を去つた玉鬘への思慕を募らせる一節にも、「大将(鬚

黒)の、をかしやかにわららかなる気もなき人に添ひるたらむに、はかなき戯れ言もつつましうあいなく思されて」(真木柱③三九〇)とあり、光源氏の懸想は言語表現のなかでもとりわけ遊戯的、演技的要素の高い「戯れ言」の語によつて展叙される。この「戯れ言」の使用は、「一線を越えることはないという枠組みがあつて初めて描かれ得た」玉鬘との関係性を象徴するともに、懸想をしつつ、あくまで「恋の演技の演出者裁決者」にとどまるという光源氏のあり方に即応するものであつたと見られる。

おわりに

多彩で巧みな光源氏の話術については、これまでも多くの分析がある^①。本稿はそれらを範にしつつ、Aの朱雀院による評言を足がかりに、光源氏の「戯れ言」の諸相を見てきた。院の評言がこれまで述べてきたような光源氏の「戯れ言」の一々を見聞してのものであるはずはないが、光源氏への嫌悪感も次第に薄れ慣れ親しんでゆく玉鬘の場合も含め、若菜上巻に至る随所で「戯れ言」で人々を魅了し、人心を掌握してきた光源氏像を見事に言いあてた言葉として読むことは許されよう。

高橋文二氏は「『すぎ人』でありつつ、『まめ人』でもあつた光源氏の性格の中に、さらに時にはをこであることを加えてゆくことが、光源氏という人物の性格を明らかにしてゆく一つの

契機になるのではないかと問題提起したうえで、紅葉賀巻の源典侍との関係で「を、このふるまい」をする光源氏に「政略家光源氏のしたたかな風貌の兆」を読み取っていた。本稿は「戯れ言」の側面からその「風貌」の一端を跡づける試みであったが、意を尽くせぬ部分も多く、なお後考を期したい。

* 『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集(小学館)により巻名・冊番号・頁数を記し、傍線などを私に付した。

【註】

- (1) 藤田加代「光源氏の造型―「ことば」から照射した人物像―」(森一郎他編『源氏物語の展望 第二輯 三弥井書店、二〇〇七年)はAに見える「なつかし」に着目し光源氏の人物像を論じる。
- (2) 柳井滋他校注『源氏物語(四)』(岩波文庫、二〇一八年)
- (3) 松井佳子・吉海直人『源氏物語』「にほひやか」考」(『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』一八、二〇一八年三月)
- (4) 引用は『本居宣長全集 第四巻』(筑摩書房、一九九九年)による。
- (5) 永井和子「源氏物語の「翁」」(『源氏物語と老い』笠間書院、一九九五、初出一九八五年)
- (6) 石坂妙子『蜻蛉日記』の〈猿楽言〉―権力者・兼家の言動―(守屋省吾編『論集日記文学の地平』新典社、二〇〇〇年)
- (7) 大野晋編『古典基礎語辞典』(角川学芸出版、見出し語「むらぐち」をみる)解説(依田瑞穂執筆)
- (8) 柳町時敏「論者」としての光源氏―光源氏論のための断章―(『むらぐち』一七、一九八〇年七月)
- (9) 藤原克己「玉鬘の物語―柔構造」と「真実全体」―(『むらぐち』五五、二〇一八年二月)

光源氏の「戯れ言」

- (10) 秋山虔「玉鬘をめぐって」(『源氏物語の世界』東京大学出版会、一九六四年、初出一九五〇年)
- (11) 三苦浩輔「光源氏の話法」(『源氏物語の伝承と創造』おうふう、一九九五年、初出一九八六年、池田和臣『源氏物語』の言語状況―物語行為の喩としての、色好みのことば―)(『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院、二〇〇一年、初出一九九七年)、山口仲美「中年の恋―光源氏と玉鬘」(『平安文学の視角―女性― 論集平安文学3』勉誠社、一九九八年)ほか。
- (12) 高橋文二「光源氏とをこ―「紅葉賀」巻小見―」(『物語鎮魂論』桜楓社、一九九〇年、初出一九八六年)

「むらぐち しんすけ 本学教員」